48億の妄想

マグロマル

筒井康隆全集 2

48億の妄想
マグロマル

新潮社

48億の妄想・マグロマル

筒井康隆全集　第2巻

昭和五十八年　五月二十日　印刷
昭和五十八年　五月二十五日　発行
定価一五〇〇円

著者　筒井康隆
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一（〒一六二）
電話　業務部　東京（〇三）二六六－五一一一
編集部　東京（〇三）二六六－五四一一
振替　東京四－八〇八番

印刷　大日本印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Yasutaka Tsutsui. 1983 Printed in Japan

ISBN4-10-644402-X C0393

筒井康隆全集第二巻・目次

長篇

48億の妄想……7

短篇

堕地獄仏法……159
ラッパを吹く弟……186
遊民の街……188
チューリップ・チューリップ……193
赤いライオン……207
トンネル現象……213
マグロマル……218
末世法華経……232
ベムたちの消えた夜……240
会いたい……248
かゆみの限界……254
カメロイド文部省……260
ハリウッド・ハリウッド……278
ケンタウルスの殺人……285
タック健在なりや……294
お玉熱演……300
トラブル……307

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

エッセイ

ファン・クラブを大組織に発展させる方法……331
『東海道戦争』あとがき……332
堕地獄日記……333
SFを追って……336
ジャズ……338
面白さということ……339
情操教育のヒントに……342
大学の未来像……344
深夜族……347

解説

三浦雅士 353

48億の妄想・マグロマル

裝幀　山藤章二

長篇

48億の妄想

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

プロローグ

午後七時五十分。テレビはコマーシャルを含めて五十分間のミュージカル・ドラマを終えた。

「あまり面白くなかったな」十秒スポットを次つぎに流しているスクリーンを横眼で見ながらタバコをくわえ、サラリーマンの父親がいった。

「僕は面白かった」椅子をずらせて背のびをしながら、大学生の次男がいった。

「おれは面白くなかった」父親がいった。「理屈が多すぎる」

「そう、ちょっとね」母親がいった。

「あの、会話のややこしいのがいいんだ」次男は食物を探してテーブルの上を眺めまわした。「あの会話がなけりゃ、ふつうの音楽番組と同じだもん」

「でも、お父さまは面白くなかったって、いってらっしゃるのよ」長男の嫁がいった。「みんなが面白いような番組でなきゃ、だめだわ」

「あの会話をぜんぶ、歌詞にしちまえばよかったんだ」長男が、今年四つになる女の子を膝の上であやしながらいった。「音楽劇なんだものな」

「でも、それだと、いってることがよくわからなくなる」次男が砂糖菓子を食べながらいった。「テーマがよくのみこめなくなって、ストーリイの面白さもなくなってしまう」

「おれは面白くなかったな」父親がいった。

「それは、わからなかったからだろ？」と次男がいった。

「だから、誰にでもわかるようなミュージカル・ドラマを放送するべきだわ」長男の嫁が、夫の月給袋をもういちどのぞきこみながらいった。「わかりやすくして、そしてもちろん、もっと面白くして……」

「面白くなかった」父親はうなずいた。「うん、絶対に、面白くなかったぞ」

「そうですね。面白くなかったですね」母親が茶碗の底を眺めながらいった。

「投書すればいい」長男はコーヒーを飲んだ。

テレビは、国内ニュースを始めた。

奥行二十・五センチの二十一インチ・カラーテレビのスクリーンは、完全自動調整になっていた。画面は室内の明るさにより、自動的に調節された。

家族は喋るのをやめて、ふたたび画面に見入った。やや薄暗い室内照明の中で、家族の十二の瞳は、スクリーンの

光を反射して光っていた。画面に向けて大きく見開かれた彼らのその眼は、まん丸くもなく、楕円形でもなかった。四隅がこころもち角ばっていて、いわばテレビ・スクリーンに近い形をしていた。

「……このため、協定有効期間も切れた日韓漁業問題は、相当難航するのではないかと見られています。浅香外相はこの件につき、十三日午後四時、首相官邸に宇留木首相をたずね……」

スクリーンには外相のにこやかな顔が映し出された。

「この人、いつ見ても好男子ね」長男の嫁が長男にささやいた。

「うん。テレビ・フェイスがいいんだ」

「外相じゃ惜しいわ。首相にしたいくらいだわ。首相の選挙も、国民投票にすればいいのに……」

「じゃあ、そういって投書すればいい」

「好男子だわ。あそこの郵便局長さんに、ちょっと似てるわ」

「そういえば、そうだな」

「好男子だわ」

「おやおや」母親が嫁にいった。「咲子さんは、あそこの郵便局長さんが好きなのかい？」

「あら、いやだわ」ちょっと笑った。

母親は嫁を見つめた。「おかしいかい？」

「いいえ、何も」

「でも、笑っただろ？」真面目な顔で、彼女は嫁を見た。

「おかしければ笑ってもいいんだよ」

「何もおかしくございません」

「そう」茶を飲んだ。「わたしがいるために、笑いたい時にも笑えないなんていわれるといやだからね」

「どうも、よくわからん」父親がタバコをもみ消した。「政治なんて、むずかしいものは、もっとわかりやすくして、それから、もっと面白くして見せなきゃいかん」

「ドラマにすればいい」と長男がいった。

「ミュージカルにすればいいわ」嫁がいった。

「マンガにすりゃいいんだ」次男はそういってから急に笑いだした。椅子の凭れの上で、身をのけぞらし、笑い続けた。

父親はあきれて次男を見つめた。「気ちがいだ」ズボンのポケットをさぐった。「タバコが切れたな」母親にいった。「お前、店へ行って、とってこい」

「売りものですよ」母親はしぶしぶ立ちあがった。「お父さん、喫い過ぎじゃありません？」彼女はそういって、昼間彼女が店番をしている店の間のカウンターから、フィルター・タバコを一箱持って戻ってきた。

そのタバコ屋は舗装道路の交叉する街かどにあった。車の流れも、この時間には絶えていた。ほんの時おり、深夜

運転で貨物を運ぶトラックが短い警笛をあげて通り過ぎていくだけで、あたりは静かだった。ビルもあれば住宅も商店もある、都心から少し離れた、くすぶった街かどだった。

家の中では、父親がまだ、むくれていた。

「どうも、面白くないニュースばかりだな。もっと突拍子もない、途方もない大事件というのはないのか。けしからん。放送局というものは、もっと面白いニュースで、われわれを楽しませてくれなきゃ、いかんのだ」

「選局が悪かったのかもしれませんな」長男がリモコン・ボックスのチャンネル・セレクターをまわした。

海外ニュースをやっている局が出た。

東南アジアの局地戦の様子が紹介されていた。原住民のゲリラ隊員が、アメリカ兵に拷問されていた。ゲリラ隊員は足の裏に鉄板を押しあてられるたびに、悲鳴をあげてとびあがった。

「あの鉄板、電流を通してるのかしら？」

「いや、まっ赤に焼けてるんだ」

「悲鳴が、よく聞こえないわ」嫁がいった。

「録音が悪いんだ」長男がいった。

「もうすこし、オーバーに悲鳴をあげればいいのに。そしたら、よく聞こえるのに」

「テレビ・カメラを向けられていることを知っている筈だから、いつもよりはオーバーに悲鳴をあげてる筈なんだがな」

「じゃあやっぱり、演技力不足なのね。あのアメリカ兵、もっとよく焼けた鉄板をくっつけてやればいいのに」

次男が身をのり出した。「アメリカ兵だって、テレビ向きに、ふだんよりは鉄板をよく焼いてる筈だぜ。だいいちカメラマンが、いろいろ注文をつけてる筈だ」

「ちっとも熱そうじゃないわ」嫁が不満そうにいった。「表情がなってないわ。それに、もっと怖そうにしなくちゃ。ドラマの方がうまいみたい。本当みたいじゃないわ」

「あの土人は」と父親がいった。「鉄板を当てられてない時は、キョトンとして、テレビ・カメラの方を見るな。あれはいかん。出演者というものは、カメラを見ちゃいかん」

「投書すればいい」

「盗み撮りや、かくし撮りよりは、画面がはっきり見えていいな」次男がいった。「あれだと木の葉や壁が画面に入ってきて見にくいからね。それにタレントが、いつ撮られてるかわからないものだから演技が間のびして、見てる方じゃ退屈でしかたがない」

「拷問する方も、もっと獰猛な顔つきの奴の方が迫真力があるのに。このアメリカ兵は若すぎるよ。せめて髭でも生やせばよかったんだ」と長男がいった。

画面が変わって、戦闘場面になった。

砲弾が畠の中で炸裂した。小銃を構えて走っていた土民兵が、棒のようにぶっ倒れた。
「簡単に死ぬのね」嫁がいった。「もう動かないわ」
「もっと、苦しむところが見たいですね、ねえお父さん」母親が父親に同意を求めた。
「味もそっけもない死に方だ」父親がいった。「撃たれた時の顔がもっと見たいな。見せるべきだ。苦悶してる表情をな。うん、見せなくちゃいかん、絶対に」
「そうですよね、放送料払ってんですものね」母親がうなずいた。
スクリーンの中で、米軍側の土民兵が、捕虜を銃の台尻で叩きはじめた。捕虜は土の上を、頭をかかえて転げまわり、身をよじった。
「もっと、頭を、頭を！」嫁が身をのり出して小さく叫んだ。
兵は捕虜の頭を踏んづけた。
「そうよ！　あ、もっと、ええい、もっと、もっと」嫁は口の縁に泡をふいていた。こぶしを固め、胸の前で振った。
兵の銃剣が、捕虜の咽喉を刺し貫いた。
「……あ」
部屋の中が一瞬しんとした。
次男がゴクと唾をのみこんだ。
兵は死体の首を切りとった。毒々しい血の色がスクリーンにあふれた。
嫁が、クククと咽喉を鳴らした。
首がコロコロと地面を転がった。
嫁が、歓喜の色を一瞬眼に浮かべた。彼女の口の縁の泡が、顎をつたって流れ始めていた。
母親がふらふらと立ちあがり、台所へ去った。
画面が変わり、一九七六年型テレビつき小型乗用車のコマーシャルが始まった。最新流行のパゴダ型髪型のコマーシャル・ガールが、車の性能そっちのけで、附属品を賞讃しはじめた。
「あら、もう終り？」嫁が不満そうにいった。「ひどいわ、あんなに唐突に終るなんて」
「投書すればいい」
「そうね。投書してやるわ。あの番組、いけないわ。そう、第一に残酷すぎるわ。茶の間向きじゃないわ。不愉快だわ」
「でも、喜んでたじゃないか」と次男がいった。
「だって、この時間なら、まだ食事してる人だっているのよ。絶対、いけないわ。よし、投書してやろう。あなた、はがき持ってない？」
スクリーンの中ではコマーシャル・ガールが、車を買ったというマイクロ・スキャナー社の社長に、乗り心地をインタビューしていた。社長が夢中で喋り続けていると、母

親が台所から戻ってきた。
「気分が悪くなってね」
「ほら、気分が悪くなった人もいるのよ」嫁が勝ち誇っていった。「あなた、はがき持ってない？」
「ないな。明日でも、モニター・ステーションへ電話したらいい」長男はまた、リモコン・ボックスをとりあげた。「他の局にしてみよう」チャンネル・セレクターを、ひととおりまわした。
「だめだ。この時間はどこもかもニュースだよ」
昼間、十三歳になる男の子を川で溺れ死にさせた婦人が、インタビューされていた。
「はい、急流だったもので、橋脚に衝突しましたのです。それで転覆してしまったのです」
アナウンサーは携帯マイクを更に婦人の口もとに寄せた。
「橋本さんの坊っちゃんとご一緒だったのですけど、橋本さんの坊っちゃんは、ボートの底板の上にお乗りになって助かりました。だけど、健夫はとうとう……」絶句して、涙を拭った。
アナウンサーは沈痛な表情をして見せた。このアナウンサーは、そんな表情のもっともよく似合うアナウンサーだった。「で、お母さまとしては、今度のこの事故を、どうお思いになりますか？」
「せっかく苦労して育てましたのに。今朝もね。私にね、こういったんですよ……」しゃくりあげた。「今朝も私に……」
「いつも同じようなことばかり、いってるわ」嫁が腹立たしげにいった。「どうしてもっと、悲しさを違うことばで、いえないのかしら」
「悲しみ方が足りん」父親もうなずいた。「本当に悲しいのなら、その悲しさをもっと表現すべきだ。われわれにわかるように、その悲しさの特殊な点を、もっと強調すべきだ。これじゃ、表現力ゼロだ。なってない」
「バカだ」と次男がいった。
「誠意がないわ」嫁もいった。「この人だって、ふだんテレビを見てるでしょうに……。どうして表現のしかたを知らないのかしら。視聴者に対する誠意が……ううん、それ以前の問題として、サービス精神が不足してるわ。こんな人からは、罰金とればいいのよ」
「本当だ。せっかくテレビに出してもらっていながら……」長男が惜しそうにいった。
「バカだ」
「こんな母親の子供は、可哀そうだね」母親がいった。
「溺れ死んでも、浮かばれやしませんよ」
アナウンサーが、画面の中でいった。「で、他にお子さんは？」
「健夫ひとりでございました」鼻をすすった。「どうして

……どうしてこんなことになったのか……」また、しゃくりあげた。「あそこには都の水道局の取水所があって、川を一部せきとめてあるんです。だから流れが急なんです。あんなものは、あんなものは壊してしまってほしいと思います……」

「でも、今はことに梅雨期だから、ボート入るべからずという文句が、橋脚にちゃんと書かれていたんじゃ、なかったんですか？」

そのアナウンサーのことばに、母親はちょっと困り、黙って眼を拭ってごまかした。アナウンサーは、してやったりという表情で、ちらとカメラの方を向いた。

「そうとも。そんな女は、ちょっと困らせてやれ」次男がいった。「あのアナウンサー、人気が出るよ、きっと」

「いや、駄目だな」父親が次男を横眼でちらと見た。「このアナウンサーは、まだ突っ込みが足らん。まだまだ綺麗ごとだ。もっともっと、この女に悲しがらせる訊ね方がある筈だ。もっと泣かせるように誘導しなきゃいかん。もっとマイクを近づけるべきだし、カメラも、もっと前進すべきだ。アップにしなきゃいかん。もちろん、女だってもっと泣き叫ぶ方がいい。日常的な災難だからといって、自分で分をわきまえて、控えめに泣く必要はないんだからな。こんなにあっさり処理したんじゃ、マンネリズムだ」

「この女きっと、ディドロ薬品の感情昂揚剤を服んでこなかったんだわ、きっとそうよ。常備薬なのに」嫁が口惜しそうにいった。

「大衆を馬鹿にするのもはなはだしい。タレントとしても、もちろん落第だ」

「この女、もう二度と、どんなことがあってもテレビに出演できないわ。可哀そうだけど」

「アナウンサーにしてもだな」長男がいった。「どうせこんな役をするんだから、あとでマスコミの殺し屋とか何とかいわれる筈なんだ。どうせそういわれるのだったら、殺し屋なら殺し屋らしく、もっと残酷に訊けばいいんだ」

「とにかく、面白くないな、うん」

「本当にそうですね」

「バカだ」

「投書すればいい」

「投書してやるわ。はがき持ってない？」

外の舗装道路では、一台のダンプカーが、タバコ屋のある交叉点に向かって、時速八十五キロで走ってきていた。運転手は一人だった。他に誰も乗っていなかった。積荷は建築用の型鋼だった。

二十三歳の運転手は、不機嫌だった。誰でもが家でテレビを見ている時間なのに、自分だけが仕事をしなければいけないというのは、実に不公平だと思って、心底から腹を立てていた。朝の四時から運転し続けていて、疲れていた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com